

Title	アフェクトの人類学 暗黒舞踏における生成変化( Abstract_要旨)
Author(s)	COKER, CAITLIN CHRISTINE
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2017-03-23
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/doctor.k20471">https://doi.org/10.14989/doctor.k20471</a>
Right	学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要約 は2017-12-31に公開
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	コーカー、ケイトリン・クリスティー ン
論文題目	アフェクトの人類学——暗黒舞踏における生成変化		
(論文内容の要旨)			
<p>ケイトリン・クリスティーン・コーカー氏の博士学位申請論文の目的は、1960年代に日本に誕生した前衛的パフォーマンス芸術、「暗黒舞踏」を文化人類学的視点から考察することにある。具体的に述べると、初期の暗黒舞踏の活動についてのオーラル・ヒストリーの収集と現代のワークショップでの観察から、暗黒舞踏における中心概念である「なること」をめぐる、その身体観を分析する。その際、近年注目されているアフェクト(affect、情動)論と「生成」をめぐる議論を援用する。</p> <p>本論文は四部から構成され、序章と終章を加えた全九章からなる。第一部は、本研究の理論的背景を明らかにする。第二部では、暗黒舞踏の歴史的背景と共同生活を紹介する。第三部と第四部は、「なること」の意味を検討する。前者は身体性とそのアフェクトに、後者はワークショップ講師の言葉に焦点を当てる。</p> <p>本論文の章題は以下の通りである。序章に続いて、第二章「暗黒舞踏ワークショップの場所と人々」（以上第一部）、第三章「舞踏家たちの共同生活、肉体への意識」、第四章「暗黒舞踏とショー・ダンス」（以上第二部）、第五章「身体間のアフェクト」、第六章「身体間の『なること』」（以上第三部）、第七章「一つの言語的イメージに『なる』」、第八章「複数の言語的イメージに『なる』」、終章（以上第四部）。</p> <p>序章では、本論文の目的、理論的背景を述べて、調査の概要を提示する。</p> <p>第二章では、後の議論に必要な、ワークショップの場所、参加者、講師らのプロフィールと、かれらの関係を紹介する。そこでは「なること」はスタイルの習得でなく、舞踏家が自分の信念をもとに、場所と参加者に応じて即興的に行っている指導であることを指摘する。「なること」の実践は事前に定まっているわけではなく、必要に応じて多様な形で提案されることを明らかにする。</p> <p>第三章では、1960年代から70年代にかけて土方巽が創始した暗黒舞踏における身体・肉体の位置づけと、活動拠点となったアスベスト館での土方を中心とする共同生活の意義を、関係者からのインタビューに基づいて考察する。舞踏家たちは一般的日本人のライフコースからはずれ、自らの生き方に向き合い、さらに踏みこむことで、社会から排除されていた肉体を認め、これを肯定することができた。本章では、肉体に肉薄するためには個人の活動のみならず、共同生活を前提とする日常実践の積み重ねが不可欠であったと主張する。</p> <p>第四章では、舞踏家たちへのインタビューをもとに、1969年から1978年までの舞踏家によるショー・ダンスやストリップ・ショーでの活動を検討し、その意義を考察した。これらのショーへの出演は、生活費や舞台上演の資金稼ぎのために必要な活動であった。</p>			

舞踏家たちがショーに派遣され、資金を稼ぐことで作品の上演や、稽古場での共同生活が可能になった。キャバレーでの出演を通じて、かれらは社会の底辺で生きる人びとと交わり、その経験を共有した。そして、「暗黒舞踏とショー」ならびに「アートとエンターテイメント」といった対比を意識しつつも、舞踏家たちはそのような二項対立に囚われていなかったことを指摘する。

第五章は、現在のワークショップで「なること」ができない事例を取り上げて、そこに認められる身体のあり方を検討する。そして、「師匠との近い関係」ならびに「身体運動の必要性」が欠如しているため、「なること」ができないと指摘している。とはいえ、身体を通じて講師と参加者とのあいだ、あるいは参加者同士のあいだにアフェクトが流動していたということを明らかにする。そして、経験を共有することでアフェクトが蓄積すると同時にその流動が生じる。ちょうど雪崩が山頂から落ちてくる際大きくかつ速くなるのと同じで、流動が生じるとアフェクトが徐々に拡大するという。

第六章では、相手の「なること」が見えたという観察者を分析の中心に据える。すなわち、観察者の視点から、踊り手の身体がいかに「なること」を示しているかを分析する。その際、暗黒舞踏における「なること」は一体どのような現象なのかを具体的に示す。それは、踊り手のアフェクトだけでなく、それを見ている観察者のアフェクトもまた「なること」へと方向づけられていることを意味する。つまり、暗黒舞踏における「なること」は踊り手と観察者が共に構築する、共有の身体経験なのである。

第七章では、舞踏家の言葉がいかに参加者の記憶または想像、感情、感覚を喚起させ、動きを導くことができるのかを検討する。その際、参加者の動きの創造性を検討する。さらに、主体がいかに自分の置かれている位置、あるいはその身体的状態から創造すなわち「なること」に接近できるのかを考察する。想像力を生かせば、言葉は踊り手の環境の構築に影響し、その結果として踊り手のアフェクトそのものを生成させるという。

第八章では、自己が複数の「なること」についての身体経験を扱う。まず、動きを通じて言葉が喚起するイメージを身体化する可能性が提示されている。そして複数の「なること」が、どのような自己と他者との関係を通じて行われるのかを明らかにする。舞踏家たちの言語的イメージでは、自己と他者のアフェクトは対立するものではなく、「なること」を共に生成させることであると示唆する。

終章では、本論文全体の議論をまとめ、暗黒舞踏の考察が、アフェクト論とその文化人類学および哲学的な生成変化論においてどのような貢献をすることになるのかを明らかにしている。身体の動きと言葉が生み出すイメージが、参加者だけでなく観察者にもあらたなアフェクトを生み、これを共有することで「なにかになる」、すなわち生成変化の経験を可能にする。このような経験はもちろん、暗黒舞踏だけに限らない。しかし、「なること」すなわち生成変化に焦点を当ててあらたな身体のあり方の可能性を模索し、これを生きることそのものへと位置づけたのは暗黒舞踏であった。

(論文審査の結果の要旨)

本博士学位申請論文(以下本論文)は、土方巽(1928-1986)が1960年代に確立した暗黒舞踏というパフォーマンスに注目し、それが当時どのような形で実践されていたのか、そして土方の高弟たちがどのようにして新しい弟子たちに暗黒舞踏を教えているのか、について、関係者へのインタビューとワークショップでの観察に基づき論じている。本論文の評価すべき点は以下の3点にある。1) 対象と方法の独自性、2) 暗黒舞踏研究への貢献、3) 理論的貢献である。

1) 対象と方法の独自性

暗黒舞踏は一般的に、前衛芸術に属するパフォーマンス・アートとみなされている。それは通常の舞踊形態と異なり、精神による身体の統御に基づく美の追求ではなく、身体そのものが精神の統御に反乱することでこれまでの見なれた身体を異化し、わたしたちにあらたな世界を呈示しようとする試みと言える。それはまた、舞踏家自身には「なにかになる」という生成変化の経験である。

近年従来想定されていなかった人びとが研究対象になりつつあるとはいえ、前衛芸術を対象とする文化人類学は皆無に近い。こうした状況下で、申請者が舞踏を研究対象に選んだ挑戦的な取り組みを高く評価したい。

暗黒舞踏を研究するにあたって、申請者が選んだのはふたつの方法である。ひとつは、土方を中心とする暗黒舞踏の共同生活の実態を、関係者へのインタビューを通じて明らかにするというオーラル・ヒストリーの方法である。もうひとつは、現代の暗黒舞踏の主たる活動になっているワークショップの参与観察である。ワークショップとは少人数を相手に合宿形式で行われるもので、主催者は暗黒舞踏家(講師)であり、参加者は国内外からやってきて短期間で舞踏のエッセンスを学ぼうとする人びとである。

申請者は、もともとバレエなどの古典舞踊に親しみ、その後暗黒舞踏に出会って来日し、実践者として長いあいだこれに関わってきた。こうした背景があるため、情報提供者とのあいだには十分な信頼関係がすでに存在していた。またワークショップにおいては学習者として参加すると同時に、外国からの参加者には通訳として接している。いわば内部者であると同時に、外部からの観察者であるという立ち位置によって、通常なら困難な研究対象に肉薄することに成功している。もちろん、半ば内部者であるという事実は、批判的な視点を取りにくいという意味で短所にもなり得るが、次項に指摘するように、申請者の学術的な関心が、暗黒舞踏という対象から適切な距離をとることを可能にしたと考えられる。

2) 暗黒舞踏研究への貢献

本論文は、オーラル・ヒストリーの手法をもとに、土方を中心とする創設期の暗黒舞踏の共同生活を明らかにしている。活動資金を得るため、女性のメンバーたちは

キャバレーなどでヌードダンサーとして踊りを披露していた。こうした活動への関心は、これまでの暗黒舞踏研究には認められなかった新たな視点である。というのも、先行研究はあくまで演目としての舞踏に注目し、さらに創設者の土方の言動を分析対象にしてきたからである。本論文は、共同生活の実態やキャバレーでのショーの経験と暗黒舞踏の実践とを連続的に捉えることで、後者を多角的に位置づけることに成功している。

さらに、土方の高弟を中心とする現在の暗黒舞踏におけるワークショップに焦点を当てることで、舞台でのパフォーマンスからは見えてこない、舞踏の背後にある考え方やそれに基づく指導法から暗黒舞踏に肉薄している。

### 3) 理論的貢献

本論文の特徴は、近年の身体をめぐる研究についての行き届いたレビューに基づいて、身体についての知見を新たに提示していることである。それは、従来の人類的な舞踊論から身体論、より哲学的な心身問題まで多岐にわたる。その際、本論文の批判対象となるのが、身体を文化の刻印を受けたテキストとみなす文化人類学的な身体論である。これにたいし申請者は、アフェクト（情動）と生成の概念を援用しつつ、文化概念に還元できない身体論の可能性を探ろうとする。

アフェクトは心身を非対称的な二元論としてではなく、統合的に捉える概念として近年注目されてきた。具体的には、ワークショップにおける講師（暗黒舞踏家）と参加者との関係、とくに講師の指示による参加者の対応を分析している。それは、「〇〇になれ」（たとえば鳥のシギになれ）といった指示である。本論文では、「なること」ができない場合やできる場合の事例を分析し、暗黒舞踏研究におけるアフェクトや生成という概念の有効性を強調すると同時に、それらを使う身体論が抽象化する傾向を批判し、具体的な身体のあり方に沿ってこれらの概念を再考することを主張している。

本研究は、暗黒舞踏についての良質な文化人類学的研究として位置づけることができる。本論文は独創性に満ちたすぐれた学術論文であるという点で調査委員の意見が一致した。

以上を総合して本論文は博士（人間・環境学）の学位に値するものと判断される。また、平成29年2月16日に論文内容とそれに関連した事項について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：                      年                      月                      日以降